

私のインド日食

小池田 洋子

昨年のカナダ日食に続いて私がインド日食に出かけようと決心したのは、昨年見た白いプロミネンス（コロナコンデンセーション）を再び見るためであった。

私は、金沢から近いという理由で大阪発、大阪着の京都JT Bのグループを選んだ。このグループは、観測地としてKARWARを予定して出発した。しかし、GOAに着いて、KARWARの近くの川に橋がなく、大型バスを渡すフェリーがないことがわかり、300kmほど川の上流を迂回することになった。日食前日の早朝GOAを出発したバスは、悪い山道を13時間走り続けた。途中、YELLAPURでスイスの観測隊の旗を見、ANKOLAの町に入った。ANKOLAのカレッジにアメリカの観測グループが来るとのことで、私達のグループもANKOLAで観測することになった。しかし、私はバスの長旅と、紅茶とバナナだけの食事に胃が痛くなり、午後8時半KARWARのホテルに着いた時は、疲れ切っていた。加えて、インド風ホテルに暑さとさわがしさのため眠れぬ一夜を明かしたので、日食当日は本隊といっしょにANKOLAに行くことはあきらめ、ホテルに残ることにした。

ホテルに残った三人は、昼食をとった後ようやく観測の準備にとりかかった。とは言っても工事中のホテルの屋上に、500ミリの小さな望遠鏡・カメラ2台と小さな椅子を運び上げるだけで準備は終わった。双眼鏡は友人が持ってきてくれた。屋上では、海を渡ってきた風が心地よく感じられ、3階の屋上のさらに上まで伸びたやしの木陰に入ると、強い太陽の日ざしもやわらげられた。そこからは海が望まれ、船も2,3隻見えていた。

私は、ANKOLAへ本隊を送って帰って来たインド人のガイドアショカに、日食についてインド人が考えていることをたずねてみた。

「インド人は、今日の日食を見ますか。」

「見ません。バラモンの教えにより、日食は見てはいけません。」

「どうして見てはいけませんか。」

「非常にめずらしいことだから悪いことが起るのです。たとえば、地震とか。そのほか、妊婦が日食を見たら、お腹の子供が死ぬのです。そして、その婦人は再び子供を作ることができなくなるのです。」

「人々はどうするのですか。」

「日食がはじまったら家の中に入ります。日食というのは太陽が怒っているのです、バラモンの人たちは、一日中何も食べないで、神に聖なる水を供え、太陽がもとにもどるまで祈るのです。子供たちは学校が休みになりみんな家の中にいます。」

「仕事も休むのですか。」

「そうです。日食後にGOAへ帰るタクシーを予約しようとしたら、今日は日食だから仕事

はしないとことわれました。」

彼の真剣に話すことばの中につい私もつり込まれそうになって、この国で日食を見たら何か悪いことが起るのではないだろうかと思いました。

午後2時18分、太陽は下の縁より欠けはじめた。

「アショカ、あなたは黒い太陽を見ますか。」

「まだわかりません。」

私は、彼に欠けていく太陽をカメラのファインダーを通して見せた。

14時46分、西にある黒点群に月がかかる。町の中は静かになる。つい先ほどまで、バスや自転車が通っていたホテルの前の道は、人っ子ひとり通らない静かな夜の町のようになった。

15時2分、中央の大きな黒点群に月がかかる。マンゴールから一人でこの日食を見に来たという48才の男の人が屋上に上って来る。私は、彼にもファインダーを通して欠けている太陽を見せる。別の男の人が、ものめずらしそうに近づいて来たので、その人にも欠けている太陽を見せようとしたが、彼は見ないという。なぜ見ないのかたずねると、見てはいけぬから見ないのだと言って怒って行ってしまった。

ふと気がつくと、一羽の子ガラスが屋上のコンクリートの上をよちよち歩いていた。その時インドの若者が近づいて、そのカラスの子をつかまえてしまった。部分食が60%ほど進んであたりが少し暗くなり始めていたので、カラスたちは木に帰ってきていた。つかまえられた子ガラスは、声をかぎりの悲鳴を上げたから、大変。木のカラスたちは一せいに飛び立ち、私たちの頭上を鳴きながら飛び回りをはじめた。私は、その若者にカラスの子を放すように注意した。一度の注意では、意味が通じなかつたらしく、二度、三度のセスチャーでようやく、カラスの子は自由の身となり、安心した親ガラスたちも、暗くなりはじめた木のこずえへもどっていった。

カラス事件がおさまったころ、あたりはさらに暗さを増してきた。アショカは、欠けていく太陽を見に、時々私のそばへ近づいてきた。太陽が細い三日月型になった時、屋上には、私達三人の日本人とアショカだけになっていた。

皆既の一瞬は、ファインダーを通して見、シャッターを切りつづけた。皆既になる少し前からあざやかなピンクのプロミネンスと、淡いコロナが見えはじめていた。太陽の最後の光が消えた時、シャープな光の線が視野いっぱいに広がった。「すばらしい。」コロナの流線は、繊細なガラス繊維のように、黒い太陽のまわりに銀白色に輝き、一本、一本が根本から先まで、はっきりと見わけられた。私は、シャッターを切る手がふるえた。露出時間を変えシャッターを切りつづけていると、巻き上げレバーが動かなくなった。フィルムがなくなったのに気づいて写真を撮るのはあきらめ、空を見上げた。暗くなった空に、そこだけがポツカリと浮き出ているようにコロナが輝いている。静寂の中に、私は体全身、何か不思議な感動に打たれた。アショカが、「星が見える」といった。私は、金星だろうと思ったけれど、一瞬たりともコロナ

から目を放すのが惜しく、双眼鏡を手に、太陽の縁をくまなくさがしはじめた。

西のリムには、静おん型の割に大きなプロミネンスが林のように並んでいた。このプロミネンスは、昨年カナダ日食に見られたプロミネンスのように濃い紅色ではなく、淡い紅色だった。この色の違いは、活動型の明るいものと、静おん型の暗いものとの違いであると考えられる。太陽の縁にそって南へ目を移していくと、内部コロナが、背の低い噴水のように弧を描いて、太陽面から湧き出ているところがあるのに気がついた。さらにくわしく見ようとした次の瞬間、黒い太陽の縁がきらりと光った。双眼鏡で見たダイヤモンドリングは今回がはじめてであった。あたりがパッと明るくなり、すばらしいコロナも、美しいプロミネンスもあとかたもなく消えてしまっていた。2分40秒、神秘的な夢を見ていたようであった。残念なことに、期待していたコロナコンデンセーションは見つけることができなかった。がしかし、4月20日に東京で開かれた、インド・アフリカ日食報告会の席上、関西の方が撮られたスライドに、小さいけれど2ヶ所コロナコンデンセーションが写っていた。今回の日食で顕著なコロナコンデンセーションが見られなかったのは、2月の黒点活動があまり活発ではなく、縁に大きなF型の黒点群がなかったことに原因すると考えられる。

ところで、ガイドのアショカは、ついに皆既日食を見てしまった。そして彼は、それ以前の自分とちがった自分を見つけ、迷信を退け、自然現象を科学的立場で見つめることのすばらしさを知った。彼は非常に感激し、後日、ボンベイで別れるまで、そのことを言っていた。この日食は、一人のインド人の思想を変えてしまった。

私たち三人は、日食後GOAのホテルへ帰ることにした。ところが、川の渡し場は、日食を見学し終えて帰る人々でごった返し、小さな渡船の順番を待つこと3時間、太陽は西に沈み、金星が輝き、黄道光が見えはじめるころ、ようやく小さな天馬船に四枚の板を渡して、自動車を2台横向きに乗せ、人や自転車、バイクなどを満載した小さなモーターボートがこれを引いて川を渡るのであった。自動車の中にいる私達3人と、アショカ、運転手は、もしこの船のバランスがくずれたら、車ごと川へ入ってしまうことになる。私は車の窓を開け空を仰いだ。西には、黄道光と銀河が交わり、東からは、木星、火星、土星をのせたしし座が昇ってきていた。私は日食を見たために、悪いことが起るとしたら……と思うと背すじが寒くなったが、こわさを忘れるために、天頂を流れる大きな銀河の渡しに身をまかせることにした。

無事川を渡り、自動車は、GOAへの夜道を4時間走りつづけた。GOAに近づくころ、南の空には、ダイヤモンドクロス、にせ十字も見られ、ホテルへ着いた時はもう12時を過ぎていた。

私の見た4回の日食中、このインドの日食は、一番すばらしいものであった。